

2016年2月7日(日曜日)の読売新聞に 被災地応援について紹介されました

THE YOMIURI SHIMBUN

読売新聞

2016年(平成28年)

2月7日 日曜日

パンと笑顔 被災地に

那須塩原「パン・アキモト」

訪問50回超す

那須塩原市の製パン業「パン・アキモト」の社員らが6日、福島県いわき市内の2か所の仮設住宅を訪れ、東京電力福島第一原発事故の避難者に、揚げたてのパンやドーナツを無料で配布し、励ました。同社は、東日本大震災の直後から毎月のように岩手、宮城、福島県内の被災地に社員が自家製パンを届けており、訪問は通算で50回を超えた。

この日午前7時半過ぎ、社を出発。いわき市内の応秋元義彦社長(62)ら社員7人が3台の車に分乗して本



社員(左)から揚げたてのパンやミニドーナツなどを受け取る仮設住宅入居者(6日、いわき市の好間工業団地第三応急仮設住宅で)

第三(122戸)で、パンとミニドーナツを揚げて配った。寒空の下、住民らは「おいしい」と言っておいながら、社員との会話を楽しみ、同社製の備蓄用パンの缶詰も受け取っていた。

泉玉露は富岡町、好間は

大熊町からの避難者が対象で、いずれも入居者は帰還困難区域や居住制限区域の人たち。震災から間もなく5年を迎え、入居者は次第に復興住宅などへ移り、現在は泉玉露が100戸を切り、好間も80戸ほど、高齢世帯や単身世帯が多くなっている。

富岡町出身の渡辺茂子さん(91)は、望郷の念を抱きながら目の不自由な長女(67)と生活する。大熊町出身の猪狩絵美さん(32)は原発事故の1か月前に長女を出産。4月には長男が小学校へ入学する。猪狩さんは「私たち家族には、とても長く大変な5年でした。やっと復興住宅への入居が決まり、ほっとしている」と話した。

今回の訪問には黒磯那須青年会議所メンバーも同行

買入販売
専門店
刀 大光堂
宇都宮市中央5-7-15
028-633-6349

した。秋間英司理事長(38)は「初めて仮設住宅の室内も見せてもらい、不自由な生活をしていると痛感した」と語った。

「パン・アキモト」は、震災後の2012年春、同県立浪江高校出身の中島七虹さん(22)を社員として採用、今回の訪問も中島さんが企画した。秋元社長は「仮設住宅で暮らす人たちがいる限り、支援を続けていきたい」と話した。